

立地に根ざした多面的生産活動

——みちのく小野小町の郷——

加賀谷 多吉

私は、今現在、言ってみれば、東北の小さな町がどんなふうになっているのか、いわば苦悶している姿とでもいいでしょうか、そうしたことを報告します。

初めに、15年から20年間にどんな変遷をたどったかを簡単に申し上げまして、あと、今どんな取り組み方をしているのか、また残っている課題、これからやらなきゃならない問題は何なのか、そういった形で進めたいと思います。

1. 秋田県、雄勝町

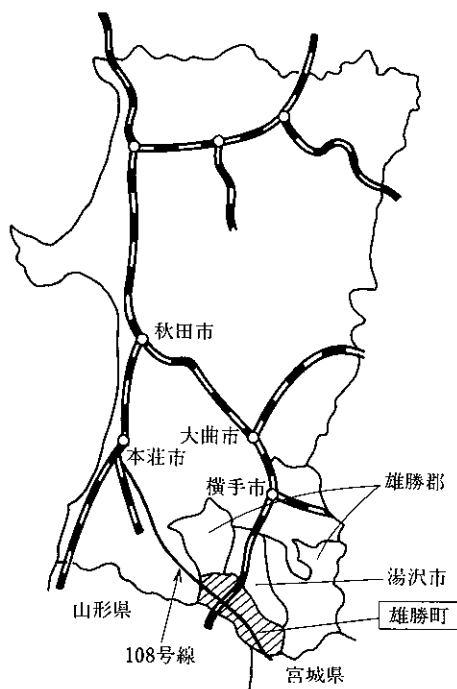
秋田県の雄勝町は、人口1万1,500人の町でして、昭和30年に院内町、秋ノ宮村、横堀町、小野村の二つの町と村が合併して、今日に至っております。

第1図に雄勝町の位置がありますけれども、秋田県の最南端にありまして、宮城県、山形県に接しております。国道13号線、JRの奥羽本線が小野、横堀、院内を通して山形に通っていきますし、国道108号線が、横堀から鬼首を通して宮城県に行く。そういう山の地帯で、大体86%が林野です。

ただ、この108号線は非常に険しい道でございまして、冬場は通れません。そんな関係が一つと、108号線は日本海の方につながる線ですが、現在それがつながっておりません。そんなことが、せっきくのいい立地条件にありながらも、雄勝町が余り発展しない阻害要因の一つになっております。

院内の町に、岩井堂洞窟という史跡があります。そこは、今から8,000年前に先住民族がいたということで、昭和53年、国の重要史跡に指定されております。

平安の時代には、かの有名な小野小町、深



第1図 雄勝町の位置

草少将が通ったと言われる小野小町の育った場所でありまして、またそこで亡くなったという遺跡もあります。

三つ目は、慶長11年に院内銀山が発見されまして、天保の年間では、戸数が4,000戸、1万5,000人の人が住んで、当時の佐竹藩を潤したんですが、佐竹藩の城下、久保田城下よりも、もっとにぎやかだと言われたんです。

明治14年には、当時の明治天皇がご臨幸しましたが、銀山は昭和29年、35年余りの歴史を閉じております。

次に地勢なんですけれども、小野道、横堀が、地図で言えば、ちょっと一番上の方の平

地になっていますけれども、ここが平地でありまして、東西 12 km、南北で 32 km、304 km² の奥羽山脈の秋ノ宮という、右側の地帯が奥羽山脈です。左側が、雄物川の上流になっておりまして出羽丘陵です。つまり、出羽丘陵と奥羽山脈に挟まれた地域でありまして、年間の平均気温は 10 度ぐらい、積雪は 2 m ないし 3 m、その期間は 5 カ月から、時によっては 6 カ月、いわゆる豪雪地帯であります。

この町の特徴として挙げていいのは、国定公園の栗駒の一角にございまして、秋ノ宮温泉郷があります。ここには、非常に豊富な地熱の資源を持っています。これが雄勝町の史跡の町、立地、特徴です。

2. 雄勝町の農業

2 番目に、雄勝町の 15 年から 20 年間ぐらいに、どんな変化をしたのかということを申し上げます。

この町の農業の状態を秋田県の平均と比較すると、第 1 点は非常に零細規模であること、農家率や農家人口は高いんですけども、2 兼農家が非常に多いということであります。同時に、そういう中でありながらも、耕地 10 a 当たりの農業所得は非常に高い。つまり、非常に小さい面積でありながら、また 2 兼が進んでおりながらも、非常に勤勉な町の農家の人方であるということを物語ります。

院内、小野、秋ノ宮、横堀という 4 つの町村が一本になったんですが、それぞれ特徴がございます。まず、院内は、先ほど申しました院内銀山のある町——今はないですけども、非常に混住化し、兼業が非常に多くて、いわゆる作業の委託が多い。

小野地区は、この町の唯一の平たん地帯にあって、農家率が高く、また 2 兼も少なく、いわゆる純農村区域でありまして、米の反収も 600 kg を超す。あるいは転作、果樹の取り組み、基幹労働力や後継ぎもあります。つ

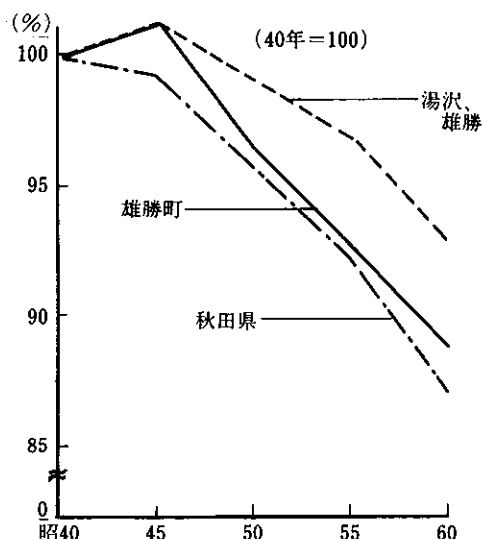
まり、最も農業的な地域です。

その次の秋ノ宮は、全く山間地帯に入って、ウナギの寝床みたいなところなんですけど、最も純農村的であり、また非常に保守性の強いところなんです。経営規模、労働力、後継ぎなど町の平均を上回っておりますし、特に複合経営が進んでおります。

最後の横堀地区は、町の役場があったり、いわゆる当町の市街化地域です。農家と非農家が混住してまして、2 兼農家が 80%、基幹労働力 30% 以下、後継ぎも少ないという場所で、いわゆる総合生産力では、評価が最低の場所であります。

以上、四つの地区の農業の概要を申し上げましたが、その後、農業、農家の動きを申し上げたいと思います。

1965 年から 20 年間でずっと見ますと、第 2 図を見てください。第 1 は、農家の減少です。これはどこでも同じだと思うんですが、特にこの町は著しいので、いずれにしても、20 年間に 200 戸の農家が減少しておりますし、県の平均よりは少ないけれども、この町



第 2 図 農家数の動き

資料：「農業センサス」。

のある湯沢、雄勝地方に比べましても、減り方が非常に大きいことが目立っております。その中で専業農家は5.1%となっており、20年前の41.4%の2兼が、現在は75.5%、約2倍になっているのを第1表で表しております。

また、20年間に農家人口率が7.2%、つまり2,692名減っております。これは、町の総人口の減少の97%に当たっております。したがって、農家の人口は、60%を割ってしまっております。

農家人口の16歳から59歳までの階層が、55年から60年のこの5年間に大幅に減りました。60歳以上が倍近くふえ、農家の高齢化が進んでいます。

次に、問題は農業の就業人口です。これも、5年間で減少率が倍か2倍近くなっていると同時に、女の方の高齢者の就業が、著しく増加しているのも特徴的です。

次に、耕地の動きを申し上げますと（第2表）、畑の面積は10年間で横ばいなんです

けれども、1戸当たりの水田は、離農する農家も出まして、上積みされております。しかし、それにもかかわらず、秋田県の平均からすれば、水田で50a、畑で10aぐらい少ない値になっております。

今、問題になっている減反の問題について触れておきたいと思います。昨年度の実績なんです、減反面積約280ha、米にかわるべき作物を選び、頑張っているんですけども、その主体はイチゴ、あるいは野菜などで43%なんです。しかし、大方は、面積を消化しなけりゃならないということが一般的でありまして、稲の青刈り、あるいは飼料作物、大豆、他用途米などで、文字どおり、面積消化型であります。

今まで見てきましたように、農家戸数は減り、2兼農家がふえ、当然農家人口は60%を割り、高齢化、女子化のなか、年ごとにふえる減反の中で、生産意欲の低下が非常に目立っております。この点は、ほかの平たん地

第1表 専 兼 業 別 農 家 の 推 移

(単位：戸、%)

年 次	総農家数	専業農家	兼 業 農 家			専 業 農 家 率	兼 業 農 家 率	
			総 数	第 1 種	第 2 種		第 1 種	第 2 種
昭.40	1,783	111	1,672	934	738	6.2	52.4	41.4
45	1,804	119	1,685	821	864	6.6	45.5	47.9
50	1,718	69	1,649	438	1,211	4.0	25.5	70.5
55	1,654	68	1,586	410	1,176	4.1	24.8	71.1
60	1,583	80	1,503	307	1,196	5.1	19.4	75.5

資料：「農業センサス」。

第2表 耕 地 面 積 の 動 き

(単位：ha)

年 次	計	田	畑	1戸当たり耕地面積			計	田	畑
				普通田	樹園地	牧草地			
昭.50	1,520	1,290	225	104	117	6	88	75	13
55	1,510	1,300	212	96	109	7	91	78	13
56	1,510	1,290	213	96	110	7	91	78	13
57	1,500	1,290	213	97	109	7	92	79	13
58	1,500	1,290	213	97	109	7	92	80	13
59	1,500	1,290	211	95	109	7	93	80	13
60	1,500	1,290	210	94	109	7	94	81	13

資料：「作物統計」。

注：ラウンド表示のため計が合致しない場合がある。

における町村に比べましても非常に顕著であります。

次に、作目についてもう少し触れてみたいと思います。もともと小野地区は平たん地なんです、非常に米づくりに対して意欲が高く、反収も上げてきております。現在でも600 kg 以上とっています。

かつて、昭和39年には、当町のその地域の石川さんという方が、米づくり日本一で東北代表になりましたし、昭和42年には、若干29歳の渡辺さんという方が、日本一の栄誉をとっております。そうした土地柄だけに、反収も、県平均をはるかにしのいでおります。

次に米以外の作目なんです、これは第3表をごらんください。当町の特徴は、ここにイチゴという欄があるんです。表の下段ですけれども、イチゴが秋ノ宮地区、108号線に沿った山間地帯なんです、ここでは秋田県のイチゴの45%を占めておりまして、文字どおり、秋田県一の生産であります。昭和59年の実績ですけれども、粗生産額では、

全国の市町村で85位にランクされております。

もう一つ特徴的なものは、高冷地を利用しました大根、葉たばこですが、これは、いずれも転作以後、立地条件を生かした取り組みであります。

第4表は果樹なんです。この果樹は、山間部でありますし、非常に雪の量が多いんですが、またその害も多いにもかかわらず、78ha作付けております。その中では、リンゴが78%、ほかにブドウ、梨、栗などがありますが、現在は、リンゴの生産競争がかなり激しいので、この町としては、秋田で育成された味のよい「千秋」というリンゴがあります。千秋というのは、秋田市に千秋公園というのがあるんです。これは、秋田という意味もあります。それから保存の効く「王林」の方に、力を入れております。

第5表は畜産の関係です。これは、非常に零細といいたましようか、戸数は少なく、しかも数字も少ないんですけれども、昭和50年

第3表 主 要 農 作 物 の 動 向

(単位: ha, t)

年 次	大 豆		だ い こ ん		キ ャ ベ ツ		ト マ ト		さやいんげん	
	作付面積	収 穫 量	作付面積	収 穫 量	作付面積	収 穫 量	作付面積	収 穫 量	作付面積	収 穫 量
昭.50	43	58	20	654	5	128	3	47	3	26
55	70	109	30	991	5	120	5	135	11	91
56	83	138	48	1,688	6	137	5	129	9	70
57	87	181	46	1,680	6	143	9	148	11	86
58	82	184	45	1,660	6	140	8	187	11	84
59	53	129	48	1,737	6	136	8	184	11	86
60	44	88	51	1,820	6	145	8	218	11	77

年 次	き ゅ う り		メ ロ ン		え だ ま め		い ち ご		葉 た ば こ	
	作付面積	収 穫 量	作付面積	収 穫 量	作付面積	収 穫 量	作付面積	収 穫 量	作付面積	収 穫 量
昭.50	4	84	2	28	6	58	42	256	15	44
55	3	75	1	11	8	94	35	351	19	46
56	4	98	4	52	8	77	38	338	17	44
57	4	105	5	69	9	93	38	283	16	44
58	4	115	5	60	9	94	42	407	16	50
59	4	115	5	64	11	125	42	319	18	49
60	5	164	5	66	11	108	42	363	18	53

資料: 「作物統計」「青果物統計」.

第4表 主 要 果 樹 の 動 向

(単位: ha, t)

年 次	りんご		ぶどう		日本なし		西洋なし		かき		く　　り	
	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量
昭. 50	94	1,863	1	15	3	42	3	35	4	50	18	34
55	84	1,600	1	19	2	39	3	53	3	17	15	27
56	84	1,511	1	19	2	25	3	32	3	15	15	29
57	84	1,433	1	20	2	37	3	52	3	21	15	26
58	87	1,699	1	18	2	39	3	52	3	18	15	29
59	87	1,143	1	19	2	37	3	52	3	21	15	32
60	87	1,507	1	19	2	34	3	51	3	16	15	34

資料: 「青果物生産出荷統計」.

第5表 主 要 家 畜 飼 養 動 向

(単位: 10 戸, 10 頭羽)

年 次	乳 用 牛				肉 用 牛				豚				採 卵 鶏			
	飼戸	養数	飼頭	養数	飼戸	養数	飼頭	養数	飼戸	養数	飼頭	養数	飼戸	養数	飼羽	養数
				1 戸 当たり				1 戸 当たり				1 戸 当たり				1 戸 当たり
昭. 50	2	10	5	頭	14	25	2	頭	5	74	15	頭	63	1,270	20	羽
55	1	10	10		9	29	3		3	86	29		32	420	13	
56	1	12	12		7	21	3		2	182	91		20	560	28	
57	1	12	12		7	23	3		2	208	104		16	590	37	
58	1	12	12		7	26	4		2	163	82		16	380	24	
59	1	12	12		7	31	4		3	159	53		17	330	19	
60	1	12	14		7	30	4		2	130	65		16	310	19	

資料: 「畜産基本調査」.

以前は、牛、養豚、鶏なんかが非常に多かったんです。それが昭和 45 年の減反以降から、むしろ非常に減っております。一番問題になるのは、農家で畜産は跡を取らないというのが、今一番の悩みになっております。

つぎに農業粗生産額では、第 1 位は、やっぱり 55.3% (S, 60) の米が一番多いんです。第 2 位は転作の関係もありまして、野菜がふえました。第 3 位が果実、ただ県内の順序で言いますと、秋田県では 69 の市町村があるんですが、この生産額は 31 位なんです。

しかし、この中でイチゴは、秋田県の第 1 位、ダントツです。大根は第 5 位にランクしております。リンゴが第 8 位になっておりまして、この雄勝町の間山村地帯といましようか、この地域の特徴がこの中に出ているんじゃないでしょうか。1 戸当たりの農業所

得は、1985 年の段階に 135 万 3,000 円になっております。

以上をもちまして、雄勝町の農業は、大体そんなものかということがおわかりいただけたと思うんです。

3. 地域の特色を活かす

次に、地域の特色を生かした動きがどんなものか、これを申し上げたいと思います。

まず、米から入ります。この雄勝町の米づくりに対する姿勢なり、実績は述べましたが、今後の方向を考えますと、労働力、農機具、施設問題がたくさんあります。受委託の方向やら、いろいろな取り組みが多様化しているんです。秋田県は昭和 47 年から、1 集落 1 農業という集落農場化の事業を進めてまいりました。

しかし、現在では、それも、町村により、あるいは集落により非常に様態を変えております。当町でも、このことは例外ではございません。したがって、当町における集落農場の姿は、今までの地域集団的なあり方から、むしろ企業化する。いわゆる会社組織にして、つまり村の中ですと、お互いに血縁、地縁の中でありますし、リーダーが犠牲的になったり、言わずもがなの形でお互いにやったりして進めてきたんですけれども、高齢化したり、あるいは兼業化が進む中で、どんどん様変わりしていきます。

そんな中で、それではやっぱりだめじゃないか。はっきり経済ベースに乗るやり方をしなきゃならんということで、会社組織にしながら、経営的な方針がないのかということで、検討に検討を重ねて、1988年から、組合法人雄勝グリーンサービス、これが第6表でございます。そこに組織の概要だとか、構成メンバーをちょっと書いておりますが、これは、5戸が出資して、1人800万ぐらいの借金になります。将来は、50haの稲づくり、そのほかの作物、あるいは緑化木の販売やら、山

林の管理までやろうという意欲で今取り組んでおります。

ここまで踏み切るにはなかなか大変でしたし、雄勝、湯沢地方は、この雄勝町のある地方なんです、ここではもちろん初めての試みです、秋田県でもそんなにはないはず。いずれ、農業も企業として成り立つ方向を模索し始めたということであり、その中で年齢を書いてありますが、上の3人、つまり30代の方が中心になって頑張るし、これから高齢化、農業の依存度がどんどん下がる、この町の農業のあり方、この組織が果たしてどこまで効果を上げ得るか、あるいはこれに続く組織ができてくるのか、これはまだ未知数です。それでも、こういった地域における若い実といひましようか、新しい試みが稲作の部門にも出てきたということを申し上げておきます。

次に、先ほど秋田県で一番イチゴがとれ、生産されているということを申し上げましたが、雄勝町いちご生産出荷組合のあり方なんです。この山合いの地秋ノ宮で、この組合がスタートしたのは昭和28年です。

第6表 「農事組合法人 雄勝グリーンサービス」

(昭和63年9月1日現在)

氏 名	年 齢 (歳)	役 職 名	経 営 面 積				備 考
			田	畑	山 林	計	
今 一	34	代表理事	223	1	700	924	
石 川 義 弘	34	専務理事	113	50	—	163	
黒 石 良 一	33	常務理事	187	4	—	191	利用権設定済
高 橋 長太郎	48	理 事	163	28	100	291	
和 泉 藤 一	41	理 事	277	4	90	371	
金 沢 育 助	37	監 事	—	—	—	—	
計			953	87	890	1,940	田+畑=1,050

組織の概要

① 組織の主たる住所

秋田県雄勝郡雄勝町小野字桐木田 41-1

② 事業の範囲

雄勝郡並びに湯沢市の範囲

③ 業務の内容

a. 稲作総合請負 b. 転作田管理請負 c. 農作業部分請負 d. 緑化木生販売 e. 山林管理請負 f. 床土、苗土、堆肥販売

出荷組合を完全につくったのは昭和34年以降なんです、高冷地、豪雪地帯という自然条件を活用して、何とか生き延びていこう。何か完全作物がないのかということで模索しながら、イチゴに取り組んだんですが、遅出しイチゴとして売り出してきたんです。現在定着しているんですが、その定着のきっかけのときには、孫に小遣いをというおばあちゃん、お母さん方が一生懸命にとって、いいものをつくったというのが発端なんです。生活改善グループだとか、そういうのがつくって、手塩にかけて、いいイチゴをつくったのを、今度はそれをさらに組織化し、また指導して、菅和三郎さんというすぐれたリーダーが生まれて、その仲間が、また技術を深め、販路を獲得するなどなど、非常に苦労を重ねて、並み大抵ではありませんでしたけれども、現在の作付面積は42ha、収穫量は363トンに達して、東京、大阪、名古屋そのほか、30社に及ぶ市場に出荷しております。

この組合の農家の経営収支については、粗収益で大体60万、所得で30万円を超して、大体定着しています。

しかし、これも問題がありまして、一つは、高齢化が進んできているということと、もう一つは、土地がだんだん——苗は土地を嫌うんです。ですから、その土地を今度は山間地より、さっきの平場の小野地区の方に苗をつくるとか、そういう形で進めていこうとしております。

さらに地域を生かしたものとしては、高冷地大根があります。標高大体500、600mの地帯ですので、減反が始まってから、米だけじゃだめなんだということで、特に夏大根を取り上げてまして、これが、非常に肌がきれいで、しかも優品で、いわゆる市場の話では、日本一だと言われるほどになりました。これが50haぐらいになって、現在も特産になっております。ただ、これもやっぱり問題がございまして、病気の問題が、これからの一

つの課題になっております。

この雄勝町には、栗駒山国定公園の栗駒の一角に秋ノ宮温泉郷があり、全国でも非常に有数な地熱の地帯です。この地熱のエネルギーをいかに生かすか。これは非常に大課題でございまして、現在まで町としては、いろいろな方面の力をかりながら、利用の研究を図ってまいりました。温泉プールその他いろいろありますけれども、農業関係で言えば、ウナギ、スッポン、テラピアなど、そういうものを養殖して、テストをし、一部は今販売に供しております。

また、その地熱利用をうまく使うことによって野菜や山菜、花、キノコをなるべく早く出すということで、これも実験が進んでおりますが、何しろ資本の関係その他で、まだ軌道には乗っておりません。これが、これからこのまた課題になろうかと思えます。

つぎに、手作り加工の取り組みとして、「秋ノ宮森林組合手づくり加工場」というのがあります。

この森林組合の加工場は、昭和30年ごろからナメコを非常に生産してきたんですが、それがどんどんふえてきてまして、販売対応に悩んで、今度は缶詰加工場をつくるようになったのが、手づくり加工場の始まりです。1985年には、250トンの原料を加工するまでになりました。

この加工場の位置づけが、現在非常に大事になっておりまして、地元の山菜、野菜、ここは、雄物川の上流の非常にきれいな水が流れていますし、雄物川ともう一つ、秋ノ宮の方は、役内川という川が流れているんですが、ここが非常にアユがよく育つ場所です。またイワナ、ヤマメだとか、そういったものが非常に出ますので、川魚の加工、それからイチゴの加工、つまりジャム、そういったものがどんどん要請されてきております。これの取り組みもしておりますが、ここではあくまでも旬のものを新鮮で、つまり自然の姿を壊さ

ないようにという形で、添加物だとか、化学調味料は一切使わないという形で今までやってきております。これが受けまして非常に好評であります。それが先ほど申しあげました品目であります。そのほかにまだつくっておりますが、いずれにしても、地域農産物を加工して、付加価値をつける役割は、今までも大事でしたけれども、これから非常に大事なものだということで注目してもいいと思います。

その次に、「小野小町芍薬苑に」ということで、この史跡の中でも、雄勝町は、ほかのことはわからなくても、小野小町の生まれ在所といえましょうか、そういうことと、もう一つは、最近、秋田県は、「あきたこまち」という米で売っているんです。いわゆるそのの本場なものですから、したがって、先ほど米づくりに一生懸命だということも、小野小町との関係は無関係じゃないわけですが、その小野小町をそのまま黙っておくのはよくないんじゃないかということになりました、芍薬苑をつくりました。

深草少将は、私はよく知りませんが、99日通ったと言いますので、99の芍薬の種類を今集めて、長野県から持ってきてましてつくっております。これをオーナー制にして、5,000円を出してもらえば、5年間、花を必ずお届けしますし、最後には1株分けてやるということになっております。

さらに、小町にあやかった話になりますけれども、立てば芍薬、座ればボタン、歩く姿は何かということで、芍薬だけでなく、ボタンとユリの花にも着手しようというのが若い人の方の考え方です。この芍薬苑は、転作田の田んぼを利用して、現在非常に好評です。

次に、「産、消提携はじまる」ということで、この小町の郷は、小町を売り物にしながら、東京のデパートで非常に喜ばれまして、産物を売りに来るんです。それがきっかけに

なりまして、千葉の下総、柏の生協さんと非常に仲よくなりまして、春には子供さん、家族ぐるみで田植えに来て、あきたこまちを植えるんです。秋にはそれを刈りに来るという形で、そのときに山菜を持っていってもらうとか、野菜を持っていってもらう形で、いわゆる田植えツアー、あるいは稲刈りツアーを家族ぐるみでやってくる。そういう形で、その輪を着々と今広げているところです。

4. 課 題

最後に、この町の課題を少し挙げておきます。

一つは兼業農家の問題です。中核農家に農地を集積してという形が今は非常に多いんですけれども、ここは、どんどん兼業化が進んでいる中でも、むしろ1兼農家に歯どめをかける。そんな形での複合経営をどう取り組んでいくかということが、これからの課題になっております。町としても、今そのことに非常に苦慮して力を入れているんですが、衆知を集めながら、いわゆる雄勝町型といえましょうか、そういう形で取り組んでおるんですが、まだなかなか光明は見出しておりません。

2番目は、中核農家をやっぱり養成していかなくちゃならん。その場合に、特に後継者、すぐれた人材をどうして育てるか。基本的には、やはり、跡を取る若い者をいかに育てるか。もうこれ以外に何もないと、今ぶつかっているところなんです、雄勝、湯沢地方は広域経済圏でございまして、これが全国で50人でしょうか、ふるさと市町村圏というのに入っていて、10億円事業があるそうです。この町では、それに参加して人材育成、つまり村おこしのリーダーを育てる。やる気のある若い人を育てるために、金も使うし、これからの一番の宝は、そこで働く、やる気を起こす若者だということで進めているので、これも挙げておきました。

3番目は、4つの町と村が一緒になった雄

勝町なんですけれども、みんなそれぞれ農協が合併していないんです。したがって、それぞれの地域における生産活動、あるいは生産組織のあり方、それがみんなばらばらなんです。ですから、この凹凸、濃淡というのが非常にありますので、この点は、何としても農協が一本になって、全体の組織を固め、さらに発展させていかなきゃならん。いわゆる農協合併が課題になっております。

その次には、面積が少ない耕地なんですけれども、基盤整備がよく行き届いていないんです。先ほど言いましたように、イチゴの苗をつくる、あるいは大根に病気が出てくる。そうなりますと、田んぼを畑に使ったり、水陸両用といいましょうか、汎用化の圃場にしなければならないんですけれども、そのことにかかる金を農家は、今はなかなかできない。そんなことで、これから農家負担を——農家が自主的にやりゃいいんですけれども、なかなかそうはいかない。そんな中で、どんな形にして負担を少なくしながらも、基盤整備を進めていくのかというのもこれからの課題だと思います。

それから加工の問題です。ここの加工場は、昭和 60 年にある程度改築して大きくしたんですけれども、それでもまだまだ設備が整っておりませんし、またこれを一つの拠点センターにして、そこではいろんなものが、国道 108 号線の問題、交通の関係もこれから出てきますと、そこにすばらしい加工場と、それに伴った販売センターみたいなものをつくって、高度な、立派なものができれば、客足をとめることもできる。現在は、売っている品物の 20% が地元販売なんです。それは、今後ますます観光その他で人がたくさん来る可能性が出てきましたので、そこを充実していくということが課題になります。

それから、繰り返しておりますけれども、地熱利用の問題なんです。ここでは、今どこの町村でも、ふるさと 1 億円——ふるさと創

生資金で、秋田県の場合は、もう猫もしゃくしも温泉掘りなんですよ。

ところが、この町も、温泉があるんですよ。しかも地熱もちゃんとあるんですよ。だけれども、それがまず十分に活用されていない。これは大変なことなんです。これを自分で活用することによって、新しい産物、加工、いろいろできるんです。そういうことで、この雄勝町はほかにはない条件なんですけれども、これをまたよくやることによって、若い人方がやる気も起こすし、またその作物をつくる、製品をつくる、あるいは売る、そういう中で、また若い人方が定着する可能性、就労の場もできるんじゃないかという部分で、これが非常に大きい課題だと思います。

何といいまして、当町は 86% が林野なんです。この林野をやっぱり大事にして、そして観光で、先ほど言った生協の方々なんかも、とっても山を喜ぶんですよ。ですから、その山の林道を整備しながら、あるいは広葉樹なんかも余り切らないで、もちろん、木炭を焼いたり、シイタケをつくったりする農家グループもあります。おりますが、同時に、そういった切った後も、ちゃんと手入れをして、山を保存し、自然を損なわないようにしていくということがこれからの課題なんですけれども、役場では、お金がなくて、なかなかそっちの方に回らないということで、非常に苦しんでいる。

8 番目は、国道 108 号線が、冬期間、通行できるようなトンネル、あるいは日本海側の方へつながることになれば、もう大変な観光の要所になりますので、交通体系をいち早く整備しなきゃならんということも課題になっております。

農業の問題は、農家の人たちだけで考えてはやっぱりだめだ。異業種の人方の強い力もかりて、今の産直、生協の方々ももちろんですけれども、そのほかにもいろんな知恵を借りてやっていかなければならないんじゃない

か。今までは、ともすれば、農業は農業の問題をその中の枠でやるというところに、一つの余りできなかったことがあるんじゃないかと思います。

最後になりましたが、史跡であり、また歴史を持っている町ですので、やはり地熱の利用、いろんな加工の問題を考えながら、観光と結びつけて、かつて秋田県では農工一体ということと言ったんですが、これは余り成功しませんでした。この町では、農工一体にあやかって、今度は農観——農業と観光を結びつけた町づくりにしたいということで、子供たちに、あるいは孫たちが、おら方の町はいいところだ。例えば東京で勉強してきても、また戻ってきて頑張るといような町にしたいということで頑張っているということをつけ加えて、余り参考にならないかもしれませんが、秋田県の南端のある町の実情を報告いたしました次第です。

○ 第6表の農事組合法人の雄勝グリーンサービスは昭和63年の状況ということで、まだ実績がほとんどないということですね。

実績は余りないのかもしれませんが、これができた経過なり、そういう法人形態というのは、特に担い手が見出しがたい場合に、あるいは土地を仮に今までやっていた高齢の人がやめていくとか、兼業でできなくなった場合に、それを受託する主体として、いろいろあっちこちでそういう事例が出てきているし、一つのあり方として今後検討していかなくちゃいけないというか、かなり可能性を持っているというか、後退局面における一つの展開の方向として考えられると思うんですが、その経過なり、考え方ですか、そこら辺と今後の見通し等について教えていただければと思います。

加賀谷 これには前史がありまして、例の集落農場を先ほど申し上げましたが、その集落農場で、村の中で仲よくやりましょうやと

いう形では、だんだん壁にぶつかってきました。リーダーが犠牲を払わなきゃならんという形で、壊れてと言ったらいんでしょうか、そういうことの中で、かつてここには飯塚農事研究会というのがありまして、それが集落農場の活動をしてきたんですが、高齢化、あるいは人がだんだん減っていく、兼業が進む。そういう中でも、農業で生き残れる方途はないのかという考え方で、こうした会社をつくったんです。

そのメンバーの中に、表の下から2番目、41歳の和泉藤一さんという方がいます。私は、先ほど異業種の人もということをお願いしたんですが、彼は農家でもあるんだけど、土建業もやっているんです。3人の若い人方と一緒に、今までのようなどんぶり勘定じゃだめだということで、そういった会社経営的なものも、彼のいろんな知恵もあり、それなりの任務分担を持ちながらやっています。

申し上げましたように、会社になったのはおとしなんです、実際はまだ赤字なんです。これは、彼らの見方としては、今35歳、和泉さんは別にして、35歳の理事が10年間でちゃんとしたものをつくろうという形で今進めているんですが、具体的にはその地域内の農家のそういったものをつくりながらやっているんです。今後の課題としては、当然「あきたこまち」を中心にした米づくりをやりますけれども、それだけじゃやっぱりだめなので、一般の兼業農家ともしっかり結びついた、米づくりだけでなく、兼業農家は、やはり米を委託するばかりじゃなくて、農業もやりたい面もあるんです。ですから、そこに働く場みたいなものも、その中でつくっていかうという考え方で今進めているんです。

いずれにしても、決して単純ではないと思います。これに参加する場合に、1人で大体800万円ぐらいの借金になるわけですから、

家族の協力、納得というところまでも大変でしたし、農家として進んでいるわけですから、まさに不退転の進め方なんです。ですから、それを見ている地域、あるいはほかの方のグループでは、あれだけの形のものでやっているのかということで、危惧の念を持っている人もおります。

しかし、彼らは、やってみなきゃだめだということで、慎重に、なおいろんな苦労をしながらも、いろんな問題を予測しながら頑張っているという現状です。ですから、これは何点をつければいいのかまだわかりません。むしろそういった、きょうお集まりの方々の中で、そういった農家の人が会社づくりにして、非常にいい事例がありますよということがありましたら、ぜひお聞かせ願えればありがたいんです。

○ この雄勝町のこういう地域の活性化の取り組みですけれども、きょうお聞きした感じでは、いろんな主体というか、いろんなところが、いろんな形で取り組んでいるようなんですけれども、この地域全体として、こういう取り組みを調整していくとか、どういう主体があって、それをどういうぐあいに調整しながら、全体として、地域のこういう活性化なり何なりの取り組みをリードしているのかというあたりについて、もう少し説明をしていただければと思います。

加賀谷 非常に舌足らずで申しわけないです。

大体加工にしろ、あるいはイチゴにしろ、水利用は別として、農協主導とか役場主導ではなかったんです。それぞれの地域で、何とか取り組んでいかなきゃならんということで、今のグリーンサービスも同じですけれども、そういった人が、まず取り組んだというのが実情です。

ただ、それを今度は役場の方で、なるべくそれがやりやすいように運んでいった。お話の、どこが主体になってといいますと、強い

て言えば、「農業指導センター」というのが役場の中にあるんです。そこの中で、それぞれの地域で何かのプランがあれば、それに対する、例えばお金でできればお金、あるいは視察見学に連れていってくださればそういった、そういうお手伝いをするという形にしながら、町全体でどんな青写真ができるかということを探しているんです。つまり、農業指導センターが役割を果たしているということです。

○ さっきご紹介いただいたグリーンサービスは、私もちょっと行った経験がありまして、お話を伺ったことがあるんですけども、そこでちょっとおもしろいと思いましたのは、第6表の一番下にある金沢さんという方がいらっしゃるんですね。この方が隣の農協の組合長だということです。この4人ないし5人の方の属している地域の組合は、余り協力的じゃないといえますか、どうしているのかなと……。金沢さんは隣の組合長さんで、もし私の管内にグリーンサービスがあれば、もっと援助するんだけれどもというお話を伺ったんです。その農協との関係をちょっとお話しいただければと思います。

加賀谷 先ほども申し上げましたが、今一番の痛恨事といえましょうか、この町の活性化のために、農業に限って言えば、農協が一致団結して頑張ってもらうことが一番だと思うんです。残念ながら、そこに立っていないのが現状ですが、農協の合併はなかなか難しいんですよ。もしなくなれば組合長の席がなくなるとか、いろいろ金勘定やら、人間感情やらなかなかあるので、そんなことを言っちゃえば身もふたもないんですが、いずれ、金沢さんという方は個人的なつき合いで、会計の方も有能な方なものですから、そういう形で参加いただいているということです。この組合のある小野農協の方では、将来はそうなるかもしれないけれども、今の時点で、それだけの資本装備をし、やっていくことは、

一体それはどういうものかなという形で、二 が実情と思います。
の足も、三の足も踏んでいるということの方